

俗物も入り交りて、吾等が茶話の會合に人無きを機會とし吾が日傘を盗み去れり、惡む可きはこの惡魔憐む可きもこの下賤にこそ。朝より晴天なれば光線の變化多く、午後に至れば、最初描きし濃部の明となりて明部は濃と變化して別物の如く感じ、改寫の時無く之を描くは愚なる爲め午後三時こゝを去る事とせり。こゝより數丁にして小瀑ある某寺の境内に到る。こゝにもまた古楓五六株あり、坂路を下れば河に面して小瀑布あり、瀑といふよりは滴る水といふ可きか。崩れし崖ありて貝殻多く附着せるを見る、こゝも昔は海にてありしなり。天竺牡丹培養を以て有名なる瀧の川康樂園に入れば、數十種は皆花咲きて黃紅自紫亂れて麗はしかりき、切花三四輪求めて園を出て、こゝに一行の三四に別れ、美はしき初秋午後の日を浴びつゝ歸途に就けり。樂しき一日は茲に終りぬ。

## 偶言

さゝかに投

▽細かいものや近いもの計りを見てみると近眼になるといふ、それで、射的などは遠くを見るから近眼を防ぐによく、眼の養生には遠くや広い處を見る必要があるとの事だ。

▽射的もよいであらう、眺望も必要であらう、併し樂みながら眼を養ふてゆくに、寫生といふ極めてよいものがある。

▽戶外寫生は、單に近視を避るばかりでなく、各種の調和した形や色彩を見るから、眼を完全に發達させる上からも最もよい手段である。

▽花を愛するものに悪人なしといふ、繪を愛するものにも悪人はない。

▽繪を描くもの出來ぬ人は世間に澤山ある、繪を樂しむ暇のない人、繪に近づく機會のない人、繪を求むるに金のない人、又は其金を出すを惜む人は澤山ある。

▽乍併繪の嫌いな人は、古今東西文明未開の別なく、恐らく一人もあるまい。

▽繪を見るを樂しむものは、二三才の小兒から白髮の老人迄、男でも女でも變りはない。

▽假りに『私はあまり趣味を持ちません』といふ人でも、子供の時には草艸紙を讀んだに違いない、武者繪を欲しがつたに違いない、字風より繪風を好み、お祭りに振廻す萬燈に、辨慶牛若の彩色を望んだのに相違ない。

▽たゞこれ等の人は、成長するに従つて趣味が變つたのである否墮落したのである、其證據にはこのやうな人、即ち多くは拜金者流でも、老年になると書畫等をヒネクリ廻すのでわかる。

▽繪の入つて居ない雑誌は賣れない、新聞迄色刷で澤山繪が入る、出版物も口繪で賣行が違ふ、廣告も繪がなければ人が注意しない。

▽自分で繪を描くとは出來ない迄も、せめては繪を見て樂しむ人になつて欲しい。

\*

\*

\*

\*

\*